

子どもの効力感を伸ばすにはどうすれば良いのか。「子どもが自分なりの選択基準、評価基準を自分のなかにつくりあげる(111頁)」ことが不可欠であると、著者は主張する。生活の場である家庭教育においては、親が子どもの内的な感覚を受け止め共感することや、子どもの自己選択を尊重することが大切であるという。また、学習や知的発達を促す場である学校教育においては、自分の努力によって結果が生じたと思えるような評価を与えることや、友だち同士教えあう機会を多く持たせることが大切であると説く。更に、家庭教育や学校教育が、実社会との繋がりの中で位置づくことの重要性も主張している。

本稿では、効力感を伸ばす教育的条件について、次の3つの観点から考察を加える。1つ目に課題設定のレベルについて、2つ目に内的基準をつくる参加について、3つ目に対話による価値観形成についてである。

1つ目の、課題設定のレベルについてである。著者は、自転車の運転を例に挙げ、「子どもの技能が繰り返しによって進歩していくと、子どもは、いわば、内発的によりむずかしい課題に興味をもつようになる」という。子どもはやさしくてつまらない課題が与えられると、より難しい課題を求める。ならば、その特性を生かすことを提案したい。授業において、教師がやさしくてつまらない課題を、あえて子どもに提案するのだ。子どもは間違いなく反発し、むずかしい課題を求めるだろう。その時、教師は子どもに付き合うのである。子ども達は、自分達の手で課題のレベルを高められたことや、ルールを変更出来たことに対して、効力感をもつだろう。佐藤(2012)は「ほとんどの授業の失敗は課題のレベルが低すぎることによって生じている。」と批判する。しかし、低すぎる課題のレベルを子ども自らが高めていける場を意図的に設定すれば、佐藤の批判は乗り越えられる。

2つ目の、内的基準をつくる参加についてである。著者は「子どもなりの内的な基準をつくるうえで、親として大事なものは、子どものなすべき活動を定めるさいに、できるかぎり参加させる」ことが重要であるという。この働きかけは、教師にとっても重要である。我々が児童に対して育成を目指す、「持続可能な社会の創り手に求められる資質・能力」は、より良い社会づくりに自ら参加していく行動力及び実践力である。内的な基準とは、価値観であると換言できる。子どもが自己決定し参加した活動が有する価値について考えることで、内的基準は確立される。行動力や実践力の源泉となる内的基準を形成させるために、子どもの活動への参加を適切に支援することが、大人には求められる。

3つ目の、対話による価値観形成についてである。著者は、「子ども同士のやりとり」が価値観形成に資すると指摘する。権威が排された場において、多角的に議論することで、相対主義的な見方が育成される。それにより、子どもが絶対主義的な見方から脱却することで、価値観が形成されるのだろう。しかし、子ども同士のやりとりに際しては、教室における同質性の高さを考慮するべきである。その点を踏まえ、学年間交流や学校間交流、校種間交流を意図的に仕組むことで、子ども同士のやりとりによる価値観形成が成立すると考える。

以上、効力感を伸ばす教育的条件について3つの観点から考察した。子どもによる課題設定、(学習)活動への参加、対話による価値形成。これら一連のプロセスは、まさに問題解決的な学習である。それを充実させることが、子どもの効力感を伸ばすことにつながると言える。私は、実践者として、価値観形成に留まらず、価値観の変革や行動化までを射程に入れた、問題解決的な学習の単元学習を、今後も研究開発していきたい。